

## 一、作法・莊嚴

### 【基本的な作法】

#### 〔お念珠〕

合掌した両手にかける。

親指と他の指にはさみ、親指は  
かるく念珠を押さえます。

指の間は開かないようにしましょう。

念珠は房が真下に垂れるようにかけま

す。



念珠は片手だけ通して合掌される方もありますが、浄土真宗ではそのような作法はありません。また、念珠の珠をすり合わせて、音を立てるようなこともいたしません。

大切な法具（お勤め等に使用する道具）ですから、丁寧に取り扱い、投げたり、指にかけて振り回すようなことは、つつしみたいものです。

合掌しないときは左手に持ちます。正式には手首にかけることもありません。

念珠には形状から単輪（一連）のもの、双輪（二連）のものがありますが、**通常は単輪（一連）のものを用います。**

### 念珠

念珠には双輪念珠と単念珠の二種類がある。色衣・黒衣などを着用したときは双輪念珠を用い、それ以外の時は単念珠を用いる。

（法式規範二六頁）

持ち方は、いずれの場合も左手の親指と他の四指の間につけて、親玉を下にして持ち、房は自然に垂らす。

（法式規範）

※門信徒の方は単輪（一連）念珠だけ用意すればよいでしょう。

念珠の中で、房の出ている一番大きな珠を、通常親玉と呼び、左右に色違いか、同色なら小さい玉が入っており、これを通常二天と呼んでいます。

玉の数は、百人を基本として、その何分の一かになっているようですが、玉の種類や大きさによっては、長さのことがあり、数は必ずしも一定しておりません。

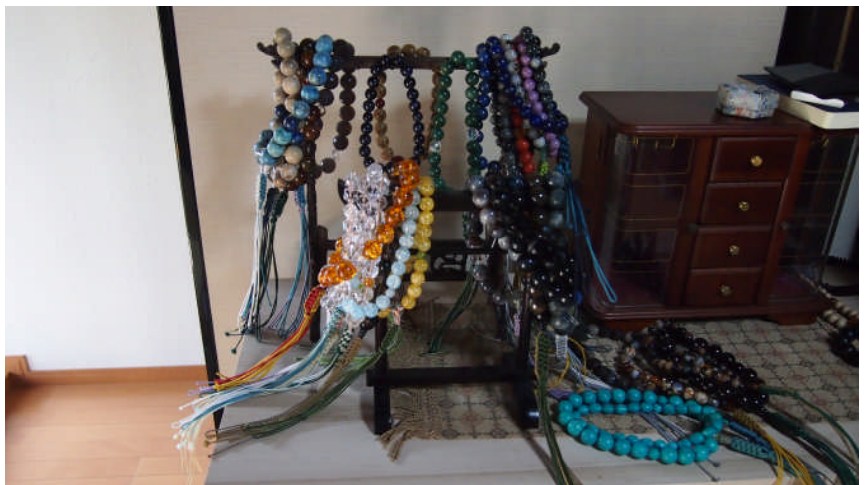
色や材質に特に制限はありませんが、汗などに弱い材質のものはさけた方がよいでしょう。

**房は、基本的には女性用は切り房、男性用はひも房です。**

ぼんでんふさ  
梵天房は用いられておりません。

ブレスレットのように、ゴム紐等を使った、腕輪念珠をよく見かけます。正式には規定されているわけではありませんが、いつも身につけることができ、常におみのりを大切にしていこうとする工夫の一つともいえるかもしれません。お念珠はアクセサリではなく、常に身につけ、大切にしたいものです。

決してお守りの類や、利己的な願い事のために身につけるものではありません。



上の写真は住職が日頃愛用しているお念珠です。

すべて住職の手作りになります。浄土真宗本願寺派の特徴として房は写真の通りひも房になります。



右のお念珠は

ラピスラズリ（瑠璃）十八mm

親玉はソーダライトの二十三mm

ません。

## 〔門徒式章〕

一般社会には、常識的なドレスコード（服装の規定）や時と場所などにふさわしい服装があります。当然、お寺や仏事の席でもふさわしい服装を心がけたいものです。

家庭での仏参（おつとめ）の時、法要の時、仏事の時、いつでも全員が「式章」をつけ、念珠をもつことを忘れないようにしたいものです。

「式章」も念珠・聖典とともに大事な法具ですので、大切に取り扱い、床や畳の上に直接置いたりしなようにしましょう。

## 〔経本〕

釈尊が説かれたお経をはじめ、祖師方が著されたさまざまなお聖教などが収められているのが「経本」です。ここには阿弥陀如来さまの私をすくわずにはおかないというはたらきと、そのすくいに遇われたよろこびが記されています。

いいかえれば、私のいのちのよりどころを明らかにしてください。この経本（お聖教）ですから、特に丁重に取り扱います。

決して、床・畳の歩行の場や、腰掛ける椅子の上に直接置いたり、お手洗いなどに持ち込むことのないように注意してください。

経本は、必ず頂いてから開き、閉じてから頂きます。頂くというのは、お敬いの心を表していますので、経本の下が、おおむね目線の高さになる

## 門徒式章

門徒であることを表示するために用いる

輪袈裟わげさの下半分に紐をつけたごく

簡略化されたもの。第二十三代

勝しょう如上人の伝灯報告法要を翌年に

控えた昭和七年に制定されたもので、寺族式章（坊守式章・寺族式章）

門徒総代式章・門徒式章がある。

（法式規範）

ぐらいにして、静かに持ち上げるとよいでしょう。

## 〔合掌〕

古くは、インドで始まった礼法で、今でもインドや東南アジアの仏教国では、合掌してあいさつをします。人間の最も美しい姿は合掌の姿勢ともいわれますので、心したいものです。

両手を合わせて、かるく胸の前につけ、指を揃えて約四五度に保ち、念珠をかけて親指でかるく押さえます。

肩・ひじを張らず自然に背筋を伸ばし、ご本尊を仰ぎ、「南無阿弥陀仏」とお念仏を称えます。

いま、私にはたらいでくださっている如来さまの「呼び声」を聞かせていただく称名（南無阿弥陀仏とお念仏を称えること）を大切にしたいものです。

## 〔礼拝〕

礼拝は、合掌したままの姿勢で、上体を約四五度前方に傾けてお礼をし、ゆっくり上体をおこしてから合掌をときます。

合掌の姿勢で上体を約四五度高むけて礼を、礼拝といい、合掌せずに上体を約一五度傾けてする礼を揖拝または「一揖」といいます。

首から上だけを動かして、頭を下げることはありません。

## 〔焼香〕

(1) 一揖（合掌せずに一礼すること）

香炉の前で一揖します。当然、如来さまに対する礼で、他の誰にするものでもありません。

(2) 着座

(3) 香を焚く

香をつまみ、押し頂かずにそのまま香炉の火にくべます。

回数は一回だけ。（他宗では二回三回というところもあり、額に押し頂くというところもありますが、当宗派ではいたしません）

(4) 合掌

手を合わせ、お念仏を称えます。

(5) 礼拝

(6) 起立

(7) 一揖

焼香の時、お導師の前を通る時は、かるく会釈をします。

○ポイント

焼香は、阿弥陀如来さまへのお敬いの心を、お香をお供えし合掌・礼拝するという作法に表したものでしょう。次のようなポイントにご注意ください。

▽香を焚く前には合掌しない

▽香を焚くのは一回だけ。

焼香する時は、焼<sup>しよ</sup>香<sup>こう</sup>卓<sup>じよく</sup>の手前

で立ち止まって一揖し、卓の前に進んで着座する次に、香<sup>こう</sup>盒<sup>こう</sup>（香を入れる器）の蓋<sup>ふた</sup>を右手で取り、右縁

にかける。香を一回つまんで香炉に入れ、香盒の蓋をして合掌礼拝する。

礼拝が終われば、起立して右足から後退し両足を揃えて立ち止まり、一揖して退く。

会館などで高い焼<sup>しよ</sup>香<sup>こう</sup>卓<sup>じよく</sup>を用いる場合は、起立したまま焼香する。

▽香は押し頂かない。

▽リンをたたいたりしない。

※場所の都合から、立ったまま行う場合や、座ったまままで香炉と香盆を回してお焼香を行う場合などもあります。いずれの場合も前記を基本とします。

---